

V・V・ローザノフの人物批評について

——『孤独』、『落葉』を中心に——

清水 昭雄

▲はじめに▼

ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ローザノフ（二八五六—一九一九年）は今日「ロシア・（宗教）ルネサンス」と呼ばれる、今世紀初頭ロシアの宗教精神復興期に、特異な個性によって文学史上、思想上に独自の地位を占めた作家、思想家、ジャーナリストである。ローザノフは人生の最後の十年間に彼の代表作といわれる独特なアフォリズム形式をもった三部作、『孤独』（一九一一年）、『落葉』I、II（一九一二年、一九一五年）、『現代の黙示録』（一九一七—一九一八年）を発表した。これらの作品は、連想によって心に

浮かんでくる「思い」——人生、信仰、神、政治、革命、文学、人物批評、思い出、家庭、性、ユダヤ人、ロシアとロシア人についてなど多岐にわたる——を文體上の工夫をともなった巧みな一連のアフォリズムによって表現したものである（『現代の黙示録』では一九一七年革命の考察が問題意識の中心になっている）。本稿はそれらのアフォリズムのなかから、人物批評に関するアフォリズムに特に焦点を絞って考察し、ローザノフという複雑な人物の精神に迫ろうとする試みである。

引用文中の（）括弧はローザノフ自身のものであり、「」括弧は引用者の注、補足文等である。また引

用は全て同一の選集からおこない、引用文の末尾にペー
ジを記した。

* Розанов, B.B., *Избранное*, A. Neimanis, 1970

一、批評が悪口か？

ローザノフの人物批評の特徴。

「いつもヴェンゲローフやカレーエフを攻撃し
ているからどうだというんだ。そんなことは取る
に足らないことだろうに・・・」

『徳』などとは何の関係もないことはもちろん
だ。

彼「ヴェンゲローフ」の仕事は尊敬すべきもの
だ。^①彼が一生プーシキンを研究しているのは感動
的でさえある。本人の（一度会った時の）応対ぶ
りにはまあ良い印象を持っている。しかし、腹の
方を見るともう（頭の中で）痛烈な論文を書いて
しまうのだ」（P.229）。

「私は文学活動で非常に多くの怒りを解消して
きた。だがそれも無駄だった。ヴェンゲローフが
嫌いなのは、言うのも変だが、太って、黒いから
だ（腹のふくれたゴキブリみたいに）」（P.229）。

これは当時の有名な文学史家、伝記作家セミョーン・
ヴェンゲローフについて書かれた二つのアフォリズム
の全文である。後者のアフォリズムだけが引用された
なら、ローザノフの人物批評はその場限りの印象に基
づいた悪口にすぎないと見なされてしまうだろう。し
かし、必ずしもそうではない。ローザノフは、後に見
るように、一般に学者という存在が好きではなかった。
まして、プーシキンの詩作品にたいする文芸社会学風
なアプローチは「尊敬すべき」ものであったにせよ、
その詩の本質にせまるものとは思えなかったのである。
ローザノフには、誠実ではあるが、散文的精神の持ち
主であると思えたヴェンゲローフがプーシキン研究を
一生続けているのは「感動的」でさえあった。ヴェン
ゲローフのせりだした「腹」は、ローザノフにとって、

彼自身の芸術観と鋭く対立するものいわば象徴であった。

しかし、「腹のふくれたゴキブリ」と表現する彼独特の語り口を他のアフォリズムにおいて多用しなければ、間違いなく、彼が多くの批判を被ることはなかったであろう。ローザノフの人物批評が極めて辛らつな悪口になる理由のひとつは、批判的感情が具体的な行為、事物、事件と結び付けられることにある。ヴェンゲーロフの場合、彼の文学研究にたいする批判は「腹のふくれたゴキブリ」という表現をとった。他の例を見てみよう。

「魂になんの悲劇もない・・・母と息子が溺れ死んだというのに。半狂乱になって、どこにインク瓶があるか忘れてもよきそうなものだが。あの男はブルードンに『悲劇的な手紙』を書いただけであった」(P.122)

これは有名な革命家、思想家、作家、ゲルツェンを批判したアフォリズムである。これもこの部分だけを

取り出したなら、極めて冷酷な意地の悪い批判にしか見えないであろう。しかし、複数のアフォリズムに見られるゲルツェンに関する言及を検討するならば、ローザノフの批判は決してその場限りの印象批評ではなく、ひとつの人間タイプにたいする一貫した批判であること、さらに、この意地の悪い批評もその構成されたコンテキストのうちでは説得力を持つものであることが十分理解されるのである。ローザノフのゲルツェン批判のアフォリズムに関しては他の小論において検討したのでそれを参照して頂きたい^②。さらにもうひとつのアフォリズムを紹介したい。

「欲しいもので息がつまらんばかりだ。素朴なわがルーシ「ロシアの古名」が、『戦争と平和』ゆえに素朴な明るい愛で彼を愛するようになった時、彼は言った、『まだ足りない。仏陀にもショーペンハウエルにもなりたくないのだ』。しかし、『仏陀やショーペンハウエル』の代わりにできあがったのはたった四十二枚の写真だった。¾や½サイズ

の、正面やら横顔やら、あるいは『足元から』とおほしき角度で、座ったり、立ったり、横になったりして、ルバシカやカフタン「いずれも農民服」や何やらを着込み、鋤の後ろや馬上で、つばなし帽や中折れ帽をかぶり、『ただなにげなく』撮ったやつだ……

いや、やつ（名声）に魂を売る者どもをあざ笑うことができるのは悪魔だけかもしれない。」

(P.124)

ここではトルストイの写真が問題にされている。ローザノフにはトルストイはナロード（ロシア民衆、人民）の側に立つ偉大な師というポーズを取ったとしか思えなかったのである（もつとも、あざ笑う自分を反省してはいるが）。当時のトルストイの名声を考えれば（トルストイは一九一〇年に死んだ）、このような批判がどれほど反感を買ったか容易に理解できるだろう。しかし、シニャフスキーが指摘したように、ローザノフのトルストイにたいする態度は極めてアンビヴァレン

トなものであった^③。一方では彼はトルストイを高く評価してもいたのである。この点に関しては後に検討しよう。

まとめとして三点を指摘しておきたい。まず第一は、ローザノフの人物批評のアフォリズムは、蜘蛛の巣のように張り巡らされ、相互に関連を持ったアフォリズム総体のコンテクスト内で理解されねばならない、と言うことである。ひとつのアフォリズムを単独で引用し、それによってその人物に関するローザノフの批評を代表させることは危険である。

第二に、それにもかかわらず、個々の悪口に近い辛らつなアフォリズムは単独に読んでもおもしろい。その効果を上げているのは、批評が批評される人物の精神の特徴をよくあらわす極めて具体的な事実と結び付けられているからである。そのような事実の発見がローザノフの才能によるものであったと言えるだろう。

第三には、あざやかな、あるいは、あざとい人物批評の背後には一貫したローザノフの人間観といえるも

のが潜んでいることを忘れてはならない。ローザノフの人物批評は決してその場限りの印象批評ではない。個々のアフォリズムのある意味でジャーナリスティックで巧みな表現に惑わされてはならない。

二、肯定的人物評価、

「宗教的人間」、魂

前章では人物批判の辛らつなアフォリズムを幾つか紹介し、その特徴をあげたが、この章では肯定的人物評価の側面から考察してみたい。

否定的人物批評が具体性にとみ、まさに急所を突くといった観があるのにならして、肯定的人物批評は、抽象的であつたり、言及される具体的人物の数が極めて少ないという特徴を持っている。

「どこにも急がない人々——それは神の人々である。

いかなる目標も立てない人々——それも神の

人々である」(P.300)

「実際小さな作家だが完全に清らかな作家がいるものだ。彼らはなんと幸福なことか」(P.147)

これは抽象的なものの一例であるが、これらのアフォリズムもローザノフの深い人間観に根ざしているのである。それはこれから徐々に明らかになるはずである。具体的人物の肯定的評価の考察に当たって非常に重要と思われるアフォリズムを、かなり長いものだが、引用したい。

「『ばあさん』の家(そこから私は二番目の妻をもらった)を知るまで、ともかく私は人生に調和や上品さ、善良さを見たことがなかった。世界は私にとってコスモス(Kosmos)少しきざだが)ではなく無秩序であり、絶望した時は単なる穴にすぎなかった。人はみな何のために生きているのか、私は何のために生きているのか、そもそも人生とは何なのか、何のためのものなのか私にはさっぱり分からなかった。」

そしてローザノフは「ばあさん」の家を知る。

「私は人生で初めて高潔な人々と高潔な生活を
知った。〔中略〕」。

この祝福すべき家では誰も誰にたいしても全く
腹を立てることがなかった。そこには、そのな
いロシア人家庭など考えられない『苛立ち』とい
うものが全くなかった。また、『なぜ他人はよい
暮らしをしているのか』、『なぜあいつがわれわれよ
り幸せなのか』といった——これまたあらゆるロ
シア人家庭に必ずあるような——羨望が全くなかつ
た。

私は驚いた。私の『観念』ではなく『生活』の
『新しい哲学』は、大きな驚きから始まったので
ある。

『先天的総合判断はいかにしたら可能か』——こ
の問いかけからカントの哲学は始まったが、私の
新しい生活『哲学』は問いかけから始まったので
はない。それよりむしろ、生活はいかに高潔にな
りうるものか、そしてただそのことよってのみ

幸せになりうるものか、『昼食用のスズキがない』
『ついたち用の薪がない』とないない尽くしの人々
が、いかに高潔に、幸せに暮らすことができるも
のか、辛く悲しい、限りなく悲しい思い出と暮ら
しながら、誰にも背むくことなく（羨むことなく）、
誰にたいしても罪を犯していないというただひと
つことよって幸せでいられるものか、というこ
とを目のあたりにし、驚いたことから始まったの
である。〔中略〕。

このことから私の新しい生活は始まったのであ
る（PI43—4）

ここで「ばあさん」の家と言われるのはアレクサン
ドラ・ルードネヴァの家のことである。貧しい田舎で
の少年時代、怠惰で虚無的な気分でもった学生時代
（もともと大学時代の成績は優秀であった）、性にあわ
ない教員生活、最初の著作『認識について』の失敗、ド
ストエーフスキーの愛人であったこともある二十歳ほ
ども年上のアポリナリア・スースロヴァとの悲劇的な

結婚生活の破綻の後にたどり着いたのがここであった。ローザノフが三十代前半のことであった。⁵⁾ 彼が二番目の妻としてめとったのがアレクサンドラの娘で七歳の娘をつれた未亡人ヴァルヴァーラである。このアフオリズムはローザノフの「神話」とでも言いたくなるもので、語り口に高い調子が感じられるが、それは誇張でも、老年において過去を偲ぶ感傷でもない。この時期にローザノフの魂のいわば「再生」があったと思えるのである。その気分は終生維持された。それを証明するのは、ローザノフが妻ヴァルヴァーラを終生非常に愛し、尊敬し続けたことである（アフオリズムではローザノフは彼女を「友」と呼び、この「友」はアフオリズムにしばしば登場する）。いずれにせよここにはローザノフの肯定的人物評価のいわば「原イメージ」とも言いうるもののはっきりあらわれている。それを一言で言うならば、「ないない尽くし」でありながら、「辛く悲しい、限りなく悲しい思い出」とともにあっても、「誰にたいしても背むくことなく（羨むことなく

く）、「誰にたいしても罪を犯さないというひとつ」とよって幸せである」「高潔な生」を生きる人々である。われわれはここでいわゆるロシア文学のヒューマニズムの伝統がローザノフのなかに脈々と流れていることを知るのであるが、この点に関しては他の機会に検討したい。

ローザノフが愛した人々とはこのルドネヴァ家の人々と数名の友人、知人であった。ここに重要な言及がある。

「私が出会った、いや私が人生において見つけた最上の人々、——『友』、偉大な『ばあさん』（ルドネヴァ）、『おじちゃん』、シチエルボヴァ⁶⁾、ウスチンスキー師⁷⁾——これらの人々は全て宗教的な人々であった。最も深い知性を持ったフロレンスキー⁸⁾、ルツイもまた宗教的であった。このことは実際何か意味のあることなのか。私の選択は決定されていたのだ」（P.73）

「宗教的な人々」とはどのような人々であろうか。¹⁰⁾

われわれはここでローザノフの信仰の世界に触れていると言えらる。しかし、この問題を全面的に扱ふことは本稿の範囲を越える。必要なことだけを問題にしておく。ローザノフにとって「宗教的」とは、「高潔な生」というこの世において非常にまれなるものを可能にするある不思議なものであった、とここでは言うておこう。彼がそれを非常な「驚き」をもって眺めたことはすでに見たとおりである。通常の観点では不幸な生を「高潔な生」に転ずるものこそ「宗教的」なものであった。「宗教的な人々」とはローザノフにとつて、いかなる生にあつても、怒つたり、恨んだり、また他人を羨んだりすることなく、自分自身の生に「高潔に」とどまることのできる人々であつた。例えば、「友」ヴァルバーラやウスチンスキーを見てみよう。

「彼の皮膚に触れてごらんさい」、ヨブのこゝとて悪魔が主をそそのかした。

この『皮膚』はどんなものにも、誰にでもあるが、ただ同じと言う訳ではない。

とても寛大で『人（人類）のために死ぬ』用意のある作家達に、彼らの作家としての存在を傷つけるようなことを言ってみるがよい。「みなさん、へたですな、あなた達を読むのは退屈ですよ」。彼らは諸君の皮膚をはぐだろう。「中略」「友」やウスチンスキーに『皮膚』がないのは驚くべきことだ。「中略」。私は『友』が侮辱に腹を立てた（これこそが問題なのだ、悪魔が言っていたのはこのことなのだ）のを見たことがない」

(P.222-3)

またルツィは次々と三人の子供を失つたが、パウロを読みながらそれに静かに耐えたのである。

これでローザノフの「宗教的人間」についてある程度の理解が得られたと思う。するとローザノフ自身はこの「宗教的人間」になり得たのか、という疑問が当然わいてくる。彼自身が「宗教的人間」でなかったことは、彼の先ほどのアフォリズムからも明らかである。しかし、ローザノフは魂の「再生」の後に、「宗

教的人間」になり得たのであろうか。私見によれば、ローザノフはこの「宗教的な」世界肯定への欲求と、死を初めとする現世の苦悩の問題を結局和解させることはできなかつた。このことは死への恐れや人生の苦悩に関するアフォリズムがかなり存在することによつても証明される。ローザノフにおける、性とイエス・キリストの対立の問題^①（旧約对新約の対立の問題——最終的には現代における宗教意識の衰退、その結果としてのロシア革命の登場という問題にまで拡大される）もローザノフが最終的な世界肯定に達し得なかつたことを示している。また後に触れるが、彼自身の「書くこと」と「宗教」の対立という問題もその根をこのことに持っていた、と言えるのである。ここではローザノフの肯定的人物評価の根底に「宗教的人間」があったことだけを確認しておきたい。

ファテーエフは「ローザノフの著作で『魂』という語ほどしばしば出会う言葉はない^②」と指摘している。

このことは「魂」の問題がローザノフにおいていかに

重要な意味を持っていたかをよく示している。「魂」は人格の深部にあってそれを規定しているものである。この「魂」と「宗教的人間」の関係はいかなるものだろうか。「魂」と「宗教的人間」との関係を直接的に説明するアフォリズムは見あたらない。しかし、肯定的人物評価がなされる規準を「宗教的人間」とするならば、その反対の否定的人物評価に「魂」の不安定、不調和、不出来をしめすアフォリズムが存在する。例えば、先ほどのゲルツェンの心の冷たさを非難するアフォリズムでは「魂に何の悲劇もない」として、「魂」の不出来が述べられているし、ゲルツェンの文才のなさは「彼には歌う要素、音楽的要素が全くなかつた。彼の魂には全く音楽がなかつた」（P.226）と説明される。また「一人の人間の中にまるまるひとつの市場がある」（P.226）とゲルツェンの魂の不調和、雑然たるさまが指摘されている。トルストイは「悪魔（名声）」に「魂」を売る、とされる。ローザノフにとって否定的人物はその「魂」がどこか損なわれている人物なの

である。したがって、「宗教的人間」の「魂」についての記述はないが、そこに調和、安定、十全を予想してもいいように思う。図式的になるが、ローザノフにおいては、肯定的人物、宗教的人間、魂の調和、安定、十全は同一の範疇であり、否定的人物、魂の不調和、不安定、欠陥は別の範疇に属するものと見なしてかまわないだろう。このように考える時われわれは先に掲げた抽象的だが肯定的であった人物評価がなされる根拠について一定の理解を得ることができる。「どこにも急がない人間」、「いかなる目標も立てない人間」とは魂が十全、満たされているが故に急ぐ必要も、目標も必要がないのであり、それ故に「神の人々」なのだ。「小さな作家」とはそれほど才能に恵まれない作家だが、それ故に才能による魂の不調和を免れ、さらに名聲に魂を乱されない、つまり「完全に清らか」な故に幸福なのである。

三、否定的人物評価

前章でローザノフの肯定的人物評価の根底に「宗教的人間」が存在すること、またそこに「魂」の調和、安定、十全が想定されることを見た。ここでは「宗教的人間」にその最高の形態を見いだす「魂」の調和、安定、十全の反対概念である「魂」の不調和、不安定、欠陥に基づく否定的人物評価について考察したい。

ローザノフにおいて魂の調和を乱す重要な要因のひとつと見なされているものに知性がある

三・一 「魂」と「知性」

信仰と知性、あるいは理性の問題は、宗教史上、哲学史上、少なく見積もっても千数百年の歴史をもち、今日にあっても解決を見ていない問題である。ロシアにおいては西欧の高度に思弁的なドイツ観念論や実証主義的な諸思想の流入にたいする民族的宗教感情の反発はスラヴ主義者によって定式化され、ウラジーミル・ソロヴィエフ等を経て「ロシア・ルネサンス」の様々

な宗教哲学者にいたるひとつの反合理主義的思潮を創り上げた。それは文学的にはドストエーフスキー文学の主要テーマのひとつである「イヴァンの人間」と「アリョーシヤの人間」の対立、あるいはトルストイの特殊な「人民主義」によく表現され、また政治的には革命運動の母体となった「ロシア・インテリゲンツィア」に対する批判のひとつの論拠ともなった。

ローザノフにおける「魂」と「知性」の問題は広くこのコンテクストのうちで理解されなくてはならない。なぜなら人格の規定要因としての魂の最高形態である調和、安定、十全は「宗教的人間」の魂に見いだされるところと考えられているからである。しかし、この問題について、ここでは人物評価の問題に絞って考察したい。

ローザノフの死後ニューヨークで出版されたアフオリズム集『はかなきもの』には「全て非常に知的な人間というものは利己的である。才能のある人間も同様だ。だから私は知的な人間も才能のある人間もあまり好きではない」(P.434)と書かれている。『落葉』に

は「娘たちよ、作家にも、学者にも嫁いではいけない。作家であることも、学者であることもエゴイズムだ」(P.151)とある。作家の問題は後に扱うとして、なぜ知的人間や学者がエゴイストであると言われるのか。ここで重要なアフオリズムを引用したい。

「もちろん私は知性を評価していた(それがなくては退屈だ)。しかし、私は少しもそれに感心したことがない。

知性はおもしろい。それは言うまでもない。だがどういふ訳かそれは惹きつけないし、感嘆させもしない(全く違った範疇なのだ)。

では神はわれわれを何によって惹きつけるのか。明らかに知性によっても、『深い英知』によってもない。では何によつてか。

私が常に感心してやまなかつたものは魂であった。私はそこで、眺め、『我を忘れた』(音楽を聞いている時のように)・・・魂は魅惑的だ(全く違った範疇なのだ)。それならば神は世界を「魅

惑』によって惹きつけるのではないか。いずれにせよ魂によってであって、英知によってではない。神は**世界の魂**であって、**世界理性**ではない（全く違ったものだ。）」(P.155)

ローザノフにとって「知性」とは人間精神の中のほんの一部分、いわば、おもしろい味付けのようなものであった。それにたいして「魂」は、「知性」とは「全く違った範疇」に属し、神がそれを媒介として人間を惹きつけるものであった。ここで言われている「魅惑」の一例としては、先に引用した「高潔な生」に触れた時のローザノフの「感嘆」を思い起こしてみるとよいだろう。

もうひとつ知性に関するアフォリズムを見ておこう。「知性というのは、まあいわば、小市民的なものである。だがいずれにせよ『第三の要素』なしに人は生き続けることはできない」。

したがってそのような知性を真正面から否定すると自体も小市民的である。

「知性、つまり小市民にたいする（神秘主義の）軽蔑そのものも**それ自体の一番端**においてなにか小市民的なものを持っている。〔中略〕」

知性にたいする真の支配は、きわめて深い、全く自分自身に潜んだものでなくてはならない。それはその人だけの秘密であるべきである。パスカールにはスペンサーは自慢させておけばよい」(P.93)

ローザノフにとって知性とは、絶えず騒がしく外部に向かう（だからおもしろいし、また役にも立つ）ものであった。しかし、安らかに自らに留まることができないという意味で自立的なものではなかった。外部に絶えず向う知性を真に支配しうるものは深い内面性（きわめて深い、全く自分自身に潜んだもの）である。それが存在しうるのは魂においてであると考えられよう。

以上の考察から次のように結論してもあながち誤りとは言えまい。ローザノフにとって人間精神の深部に

存在し、神とつながっているものは魂であり、そこに
 おいて人は真に世界に留まることができるとは（従って
 「高潔な生」が可能である）。一方、知性とは人間精神
 の表層にあり、決して自立しえない、常に外部に向か
 うものである。それは世界に向かいながら決して世界
 と和解し、安らかに世界に留まることができないもの
 である。このように考える時、われわれはなぜローザ
 ノフにおいて、知的人間、学者がエゴイストとされる
 かを理解する。彼らは人間精神の本質的部分ではない
 知性に偏向し、魂を離れ、あるいは魂を損ない、絶え
 ず外部を求め（おもしろさや実用を求め）ながら、本
 質的には世界と和解しない、つまりエゴによって生き
 るエゴイストである。

才能についても問題は同様であるように思える。才
 能も何かについての才能であって、自立的なものでは
 ない。ひとつの才能のみを発達させることに励むこと
 は、魂の調和、安定をもたらすことではない。ローザ
 ノフの才能にたいする低い評価はこのことに基づいて

いるのではないか。「作家の才能は自然に彼の人生を
 腐食してゆく。幸福を、そして全てを腐食する。才能
 とは宿命である。何か人を酔わす宿命である」(P.169)。
 実証主義者、革命家、これらの人々も同じ理由によっ
 てローザノフに否定的に評価された。

ローザノフにとって実証主義者とは表面的世界の規
 定性にとどまることのできる人間タイプ（『実証主義
 的な人間』はオーギュスト・コントよりずっと早くに
 生まれた）(P.35)である。彼らは知性を信じてても信
 仰や魂の存在を信じない。不幸な人生を「高潔な生」
 に転化させるあの逆説を信じない人々である。つまり、
 魂の要求を感じない人間である。したがって彼らは祈
 ることもないし、泣くこともない。「実証主義者が泣
 いたなどということがありうるのか」(P.109)。

「彼は夫として妻を愛さなかったし、父として
 子供たちを気遣うことがなかった。妻が裏切れば
 彼は『手を振り』、息子が学校を追い出されれば、
 学校を罵り、他の学校にやった。このような『実

証主義者』にとつて宗教とは何なのか」(P.88)

魂も信仰も認めない「実証主義とは瀕死の人類の上に立つ哲学的靈廟である。(中略)。私は、それを軽蔑し、憎み、恐れる」(P.109)

基本的には極めて非政治的人間であったローザノフが二つのロシア革命という極めて政治的な状況をいかに評価したかという問題は実に興味深いものがある。すでに述べたように『現代の黙示録』の主要なテーマのひとつは一九一七年革命の検討であった。しかし、ここではローザノフの革命、革命家にたいする見解を全面的に検討することはしない。彼が革命家をどのように評価したかを簡単に見ておく。

革命家はローザノフにとって次の二点で批判されるべき人間であった。第一に、彼らは世界を精神の深部、すなわち、魂において把握するのではなく、知性のレベルで見ると。したがって世界は彼らにとつて矛盾に満ちた不満の多いものとなる。それを彼らは自分たちの知性や他の社会思想家が考え出したプランにしたがっ

て改造しようとする。実際には彼らは自分たちの夢を世界に押し付けようとしているのだ。第二に、彼らはそのような自分たちを人民の指導者、偉大な事業を行う人間と考え、人民を煽動し、犠牲にする。しかし、実は彼らは独り善がりの「オナニスト」にすぎない。

現実に国を支えているのは為政者であり、人民の苦悩の側に立っているのは墮落しているとはいえ教会である。ゲルツェン批判はこの二点から行われている。しかし、ゲルツェンについては他の所で書いたので、ここでは今述べた革命家一般への批判とは異なった、いわばからめ手からの批判ともいべきものとしてチェルヌイシェフスキーに関する評価をあげておく。ローザノフによれば、チェルヌイシェフスキーは「為政者」としての能力という点では、「スペランスキーよりも、『エカテリナ時代の俊英』の誰よりも、華麗なペステリ、愚かなバクーニン、虚栄心の強いゲルツェンよりも優れていた」(P.15-6)。ところが彼に実践の場を与えない馬鹿げた状況が彼を哲学めいた文筆、社会評

論、文学の世界に投げ込んでしまった。そして思想の世界で彼は滑稽で、奇をてらったようなことをした、つまり、ニヒリズムを完成した。ピスマルクにもなれた人物が国家に仇をなしたのだ。ローザノフはこのことをロシアのために惜しんでいる。

三・二 名声を求める心、偽善

やはり魂を損なう要因としてローザノフに注目されているものに名声を求める心がある。

「いずれにせよ有名になること、認められること、確固としてあることを人は求める。これは足の汗、耳の垢のようなものだ。いつもムズムズして、いつも悪臭がする。このいとわしいものは断固としてはつきりさせ、『それを軽蔑しろ』という必要がある。

「中略」。オリガ（ルツイの妻）や『友』にはほんのわずかも有名になることへの欲望がないのは驚くべきことだ」(P.103-4)

しかし、問題は目につき易く、ナイーブな名譽心で

はない。魂の内に潜んでほとんど他人には見えないにもかかわらず、常に他人の目を気にし、他人の目によく見えようとする心、ほとんど偽善ともいえるものにローザノフは敏感であった。このよい例が既に見たトルストイに関するアフォリズムである。この問題をより深く考えるためにトルストイ評価を検討しよう。ローザノフはトルストイを批判しながらも一方では彼を高く評価していた。

「言葉の偉大な技術という点ではトルストイは幾分ではあるがプーシキン、レールモントフ、ゴリに劣る。〔中略〕

しかし、彼が彼ら全員に優るのは生活の全一的な運動での高潔さと真剣さにおいてである。『彼が何をしたか』という点ではなく、『彼が何を望んだか』という点において優っていた。〔中略〕作家として彼はプーシキン、レールモントフ、ゴリより低い。しかし、人間としては彼らより上だ・・・彼はおそらくあまり知的な人間では

ないかもしれない。しかし、われわれの中の誰も、高潔な、偉大な理想に向かつてあのように専念してはいなかった」(P:159—160)

高潔な生活、知性と才能についてのローザノフの見解を知っていれば、このトルストイ評価が非常に高いものであることはよく分かる。ローザノフは、トルストイにおける理想と現実の壮絶な闘争をよく知っていたと言ふべきであろう。にもかかわらずローザノフはトルストイを承認できなかった。ローザノフはトルストイのうちに、ある種のポーズ、芸術家であることを拒否しようとしながらもやはり表現者(思想家、偉人)として他人の目を意識してしまうエゴの存在を見ていた、とも言えるだろう。トルストイは現実的には何の危険もおかさず「『自分の理念とだけ』冒険した」(P:45)という厳しい批判も存在する。

他者の評価を意識することによって自己の魂に留まることができない弱さがトルストイにあったとすれば、その対極にいる人物としてK・レオンチェフがあげら

れる。ローザノフはロシア思想史における孤独な思想家レオンチェフを高く評価した人物としても名高い。ローザノフがレオンチェフを高く評価した最大の理由はレオンチェフの思想にたいする態度にあった。すなわちレオンチェフが自らの思想の表現においては決して他人の目を意識しなかったということである。ローザノフはこれを「強い」と表現した。

「私が出会った他の有名な人々、ラチンスキー、ストラーホフ、トルストイ、ポベドノースツェフ、ソロヴィヨーフ、メレジコフスキーは私より強くはなかった。「中略」。そうだ私よりも更に強いと感じたのはコンスタンチン・レオンチェフであった(彼との往復書簡がある)」(P:63)

レオンチェフに関する自分の論文について、彼だけを描くべきであったのに、「自分を付け加えてしまった」と述べ、これは当時あれだけ愛し、また現在も愛している故人への愛の欠如を意味するとして次のように書いた。

「だが私は付け加えてしまった。「中略」。

『とにかく鏡を覗く』寡婦のように。「中略」

偉大な作家と取るに足りない作家はただこのことによって区別される。鏡を覗くか、覗かないかということ。

ソロヴィヨフはこの鏡を拒絶する力を持たなかったがレオンチェフは鏡を見なかった」

(P.133)

ローザノフによればトルストイも「鏡」を覗いたと言わねばなるまい。しかし、この「鏡」を覗いたか、覗かなかったかという問題は、ローザノフの人物批評の核心に近づくものであるが、あまりの主観性の故にあやうい地点にあると言わざるをえまい。

名声や、他人の賞賛を求める卑屈な態度、その反対の「強い」態度にたいするローザノフの評価を見たが、名声どころか他者からは完全に無視され、しかも何の強さも持たない存在、すなわち完全な弱者にたいしてローザノフが強い共感を持っていたことをここで指摘

しておこう。ローザノフは時としてこの弱者の立場から既に名声を持つ者達への反感を表明した。トルストイ、ソロヴィヨフ、ラチンスキーへの反感について述べた後で次のように書いている。

「市電に押しつぶされた最低の犬ですら、（口先の）彼らの『哲学』や『社会評論』より魂を強く揺り動かした。この『押しつぶされた犬』はおそらく何かを説明している。彼ら三人には『押しつぶされたところ』が全くなかった。それどころか彼ら自身が甚だしく『押しつぶした』（論争でも敵でも）「中略」。心が痛む事柄や人だけを愛することができなのだ。彼ら三人については『魂が痛む』何の理由もなかった。そのせいで私は彼らが好きになれなかったのだ」(P.90)

ローザノフにおける否定的人物評価が「宗教的人間」のもつ魂の調和と安定を欠いた人物への批判であること、そして、魂にその状態をもたらす要因としての知性と他者の賞賛への渴望を検討した。では、ローザノ

フ自身は自らの魂をどう見ていたのであろうか。

四、自己評価、そして文学

われわれは「宗教的人間」をローザノフの人物評価における最も重要な規準として考察してきた。既に指摘したように彼自身は「宗教的人間」になれなかったし、魂の安定を得ることもなかった。ローザノフは自分をトルストイ、メレジコフスキー、ゲルツェンと並んであげ、「これらの人々は混乱と嵐、悪意と興奮。非凡な何かがあるとしても、それは安らかでも、晴朗でも、調和的なものでもない」(P.59)と書いた。名声を何度も否定するアフォリズムを書きながら、「私が『自分についてあまり書かれない』ことを渴望しているなんてことがあるか」と認め、「自分の中の最も下司なものから逃れてはならない。下司と天才。ありふれた、おそらくは普遍的な人間の運命である」(P.236)と自分の心の中に下司な感情があることを吐露し、開き直っている。また「いずれにせよ魂から

『小間物屋』——すべての口惜しき、怒り、自惚れといったもの——を拭い去ることはできない」(P.183)とも書いている。ローザノフの魂は混乱していた。

「私の魂はなにやらもつれていて、そこから足を引き抜くことはできない」(P.134)。しかし、彼はレオン・チェフ的な意味で「強い」部分を持っていた。『孤独』以来私がペレドノフ、あるいは、スメルジャコフであるという見解が最終的に確立された。メルシー「ありがたいことだ」(P.174)と言い切れたのである。この理由は何か。重要なアフォリズムがある。

「私は高潔な作家か？」

もちろんだ。私がこのことを確信していなかったら、ひとつの論文も(そうだ金のためでも)書かなかった、つまり、『魂から』『心から決して』書きはしなかったろう。(中略)。

では高潔でないとはどういうことか。

『取り入ることである』

しかし、私は誰にも取り入らなかつた。

『媚びることである』

しかし、私は誰にも媚びなかった。

『自分の信念に反して書くことである』

一度もなこ」(P.294)

このアフォリズムでローザノフは自分を「高潔な作家」と言っている。「高潔な人間」と「高潔な作家」はいかなる関係にあるのか。ここでローザノフにおける「書くこと」の問題、「文学」の問題に直面することになる。ローザノフにとって「書くこと」「作家であること」は宿命である。書くことは運命である。書くことは不幸である」(P.91)「私の生涯は全て困難の連続であった。内からの罪、外からの不幸。ただひとつのなぐさめは書くことであった。だから私は絶えず書いたのだ」(P.369)。ローザノフは書かねばならなかったのだ。彼にとって文学は、何か立派なもの、研究しなければならぬようなものではなかった(ヴェンゲーロフへの批判を思いだしてみよう)。ローザノフは先に見たように作家であることはエゴイズムであると感

じていた。ここには、思想家にせよ文学者にせよ、自己の思想、自己の文学を表現する者と「宗教的人間」の根源的対立が潜んでいるように思われる。「宗教的人間」の行き着く所がエゴの消滅、世界の完全肯定であるのたいして、表現者には究極的に表現主体のエゴが残存するからだ。もし彼が「宗教的人間」であったなら「書くこと」なしに「内からの罪」、「外からの不幸」に高潔に耐え得たはずである。しかし、ことはそれほど簡単ではない。なぜならローザノフは書くことのうちで彼自身の「神」と結び付くことができると感じていた節があるからだ。ローザノフは一方では「書くこと」の罪を感じながら、一方では「書くこと」によって世界へ、彼自身の神へ至ろうとしていたともいえるのである。この問題はローザノフ自身の「神」、彼の文章に独自の具体性をもたらしている彼の特殊な世界感受の仕方、さらには独自のアフォリズム形式成立の問題ともかかわる大きな問題であるから、別に一稿を用意し検討したい。ここでは「書くこと」がロー

ザノフにとって「宗教的人間」ではなかったことの代償行為であった側面があることを指摘しておきたい。だからこそ彼は「書くこと」において高潔でなければならなかったと言えるのである。つまり自らの魂の美しき、醜さ、偉大さ、卑小さ、偽善、その全てを誰にも臆することなく、恥じることなく、ありのままに表現する「強さ」が重要であつたのだ。

《あとがき》

『落葉』について今まで最も精密な研究を行ったシニャフスキーはその著書の最終章でローザノフの思想的立場を「無原則ではないが無責任」と指摘している。その際の「無責任」とは「思想がいかなる結果を持ちうるか考えない」ことである。このことはローザノフの人物評価に關してもあてはまる。ローザノフには人物評価の際の深い原則があつたと思う。それは彼なりの「魂の原則」とでも言いうるもので、その原則から外れたり、抵触するものを彼は敏感に嗅ぎ付け、後の

ことも考えず、自己の文才によって厳しい批判をくわえたのだ。（自分自身に關しては表現において「高潔な作家」であろうとした）。

本稿はローザノフの人物評価における「魂の原則」を探る拙い試みとなつた。「宗教的人間」を中心にローザノフの人物批評全体を構成しようとしたため、多彩なアフォーリズムの森を歩いたことのある人は、本稿が単純化し過ぎていると思われるかもしれない。しかし、ローザノフの人物評価に占める「宗教的人間」の意味は揺らがないと考える。

ローザノフ自身の独自の「神」観念、独自の世界感受を媒介として「神」に至ろうとする手段とも見なせる彼の「文学」、という二つの問題にはほとんど触れることができなかつたため、「宗教的人間」の理解がいささか浅薄なものになつた。また人物評価の問題としては、革命家以外の政治的人間（例えばリベラル）の評価、性の問題を中心としたゴゴリ評価、ドストエーフスキー評価、さらに、人間でもあり神でもあつ

た神人人間、イエスの評価にも言及できなかつた。いずれも一稿をもうけて考察したい。

注

- (1) グレルバーフ宛の第三十二番目の手紙で、ロシア文学におけるユタヤ系作家、研究者の意義を評価した部分に「ヴェンゲーロフ、伝記における、清らかで高潔な働き者」(P.560)とある。
- (2) 「ローザノフはなぜゲルツェンが嫌いだったのか」、「ロシア手帖」(ロシア手帖の会)、第三十六号、一九九三年六月。
- (3) シニャフスキーは「憎悪に満ちた愛情」と表現している。
Синявский, А. (Опасные письма) В. В. Розанова,
(Синтаксис) Париж, 1982, стр. 314
またローザノフとトルストイの関係に関する最新の研究として次のものがある。
Николюкин, А. Н. (Заблудное возле Толстого)
(В. В. Розанов и Л. Н. Толстой), (Знание-сила), Российский литературоведческий журнал,
1993, No.1
『落葉』には次のような記述がある。
「私の理想はペレドリースキーとアスラーエフである。落ち着きのある良識と高い人間性においてはアスラーエフである」(P.182) ウラジミール・ヴァシーリエヴィチ・
- (4) ペレドリースキー(一八六九?) 評論家。フォードル・イヴァーノヴィチ・アスラーエフ(一八一八—一八九七年) 芸術学者。モスクワ大学教授。ローザノフは彼の授業に出席した。
- (5) ローザノフが二番目の妻ヴァルヴァーラと知り合ったのはローザノフが二十代の時である。しかし、二人が結婚したのはローザノフ三十五歳の時であり、次の記述がある。「私自身が『再び生まれた』、いや本当に『生まれた』のは三十五歳にもなった時のことで、それはエレットで現在の妻、五十五歳の彼女の母、七歳の孫娘のもとであった」(P.336)
- (6) ナジェージダ・ロマノヴァ・シチェルボヴァ(一八七一年頃—一九一一年)、「ルースキー・ポロムニク」誌の女性編集者。
- (7) アレクサンドル・ペトローヴィチ・ウスチンスキー(一八五四—一九二二年) ノブゴロドの司祭。
- (8) パーベル・アレクサンドルヴィチ・フロレンスキー(一八八二—一九四三年)。高名な宗教哲学者。学者。ローザノフの親友。
- (9) 本名はイヴァン・フォードロヴィチ・ロマノフ(一八六一—一九一三年)。作家、評論家。ローザノフの親友。
- (10) 次のようなアフォリズムもある。
「宗教的人間は賢い人よりも、詩人よりも、勝利者よりも、弁舌家よりも上である」(P.73)
- (11) ほんの一例をあげる。

- (12) 「通りを歩いているこの全ての人々も死んでゆくのか。何と恐ろしいことか」(P.400)
ゴレルバーフ宛ての第二十一番目の手紙にはこの問題が簡明にまとめられている。その一部には次のように書かれている。
- 「宗教一般を、まさにその本質、その源泉、生命の樹(男根)を根絶するのに、彼「人としてのイエス」あるいは彼「神としてのイエス」には、宗教の非男根化「去勢」で充分であった」(P.529)
- (13) Фатеев, В.А. *(В.В.Розанов, жизнь, творчество, личность)*. Ленинград, 1991. стр. 320
- (14) 一九〇五年革命を批判した有名な論文集『道標』のゲルシェンゾーン論文などはこの部類に属する。ちなみにローザノフは、『道標』について次のように述べている。
- 「『道標』の著者のうちでただ二人——ゲルシェンゾーンとブルガーコフだけが私を失望させなかった。政治入評論▽を書くことは何と不幸なことか。虚偽に落ち込まないではすまない。しかし魂は不死だ。宗教は政治よりもなんと上にあるものか」(P.49)
- (15) シニャフスキー、前掲書、стр. 290